トリ目・ウオの目・おか目はち目 ㊸

「博多の春を彩るフランスの音色」

福岡女学院大学客員教授
斎藤裕三

号外、号外、4月1日付『うわさ』の号外でーす！

「小泉内閣本日解散」

えっ、違う？　解散じゃなか？　なんしようとかいね編集長は。ほんなごとに。

ばってん、どうせ博多のうわさたい。アイム・ソーリ、小泉ソーリ。気にせんどいて！

ところで、サクラも満開！　鳥たちも野山で楽しく歌う。「沈黙の春」いずこ。

だから筆者も、今月の『うわさ』を、博多の文化を彩るすばらしいフランスの音色で飾ろう。セ・シ・ボン！

挑紳士服のタケハラ
川端通り二七一二九八一

さて、福岡市の貫線、明治通りを呉服町から千代町に向かい、蓮池から左（北）に折れて少し行ったところ（博多区中呉服町8―15）に、「鹿鳴館」という西洋古美術の店がある。

店には、アールデコの家具を始め、フランスなどから輸入した大小様々な古美術品が、ところ狭しと並ぶ。一瞬タイムトリップして、18世紀、19世紀の世界に迷い込んだような錯覚に襲われる。

店主（社長）の安川勝直さんによると、ちゃんとルートができていて、しばしばフランスなどに、このような古美術品の買い付けにでかけるとのこと。

安川さんが、ある意味で商売を離れて打ち込んできたものがある。それは、ヨーロッパでできた古いオルゴールや自動オルガンなどの自動演奏楽器類。

自動オルガンの歴史は、ヨーロッパでは1400年以前に遡り、日本でも、「オルゴール」という言葉が、1830年（天保元年）発行の『嬉遊笑覧』に見える。

福岡市で、平成14年4月20日から6月2日まで、西日本新聞社主催、福岡市博物館で開催した展示会に、所蔵家の協力で15件近い自動演奏楽器が展示された。

鹿鳴館にも、金属のディスクやシリンダーに、音を出すための突起が細工されている大小オルゴール、また、折り重なって続く穴が開いた厚紙（ブック）によって演奏が進む自動オルガンが並ぶ。

安川さんがハンドルを回すと、シリンダーやディスクが回転を始め、古い懐かしいメロディーが鳴りだした。ヨーロッパ製のものは民謡やクラシックの一節、アメリカ製のは、アメリカ初期の賛美歌《主よみ許に近づかん》というように。

筆者が昔セントルイスに行ったとき、「メロディー・ミュージアム」という自動演奏楽器の博物館があって、たくさんの自動演奏楽器が展示されていた。25セントコインを入れると、希望の曲を1曲聴かせてくれた。バンジョーとかヴァイオリンなどの弦楽器もあった。

鹿鳴館は広くないので、自動オルガンは福岡空港近くの倉庫に保管してある。

ここには、2つの見事な自動オルガンがあった。

一つは、フランスの「リモネール・フ

贈ります。博多の心。―
博多人形
博多織
増屋
博多上川端商店街☎(281)0083番
天神地下街店☎(771)1070番

フラワーズ
Qtane キュータネ
キュータネ・インテラス(川端店)
TEL (092)281-0917番
FAX (092)281-9015番
キュータネ・マリアハウス(親不孝通店)
TEL・FAX (092)734-0008番
キュータネ・グリーンテラス(筑紫野店)
TEL (092)928-5055番
FAX (092)928-5530番
九州種苗株式会社
本社　〒812-0061 福岡市東区筥松新町1番11号
TEL(092)621-2100(代)　FAX(092)623-4110番

レール社」が1978年に製作した「フェアグランドオルガン」。高さ205㌢、幅が204㌢もある。木製オルガンパイプ、ドラム、シンバルなどの楽器を備え、4体の人形が手に待った鐘を打つ。

正面上部には、セーヌ川やノートルダム寺院の風景、下半分には草花やリュートなどの古楽器が描かれていて、とても華やかな雰囲気を醸し出している。

この楽器の演奏曲目は、当然フランスのシャンソンが多いが、ヨーロッパのクリスマスの曲も含む。それで昨年12月、西日本日独協会のクリスマス会に、安川さんの好意により無料で貸し出され、豊かで柔らかい音が参加者を楽しませた。

もう一つは、1930年代、ベルギーのデ・キャップ社製の「ジャズオルガン」。高さ250㌢、幅350㌢と一回り大きい。曲目は、ブックを変えればどんなものでも演奏可能。アントワープのカフェに同種のものが置かれているという。

筆者が鹿鳴館を訪ねた日、安川さんは、ちょうどベルギーでの買い付けから帰って来たばかりだった。

ベルギーといえば、リエージュという町に、この町出身の大音楽家の名前を冠した「セザール・フランク音楽院」という音楽学校がある。

筆者に音楽への耳を開かせて頂いた方の1人、故江口保之先生（元県立福岡高校教諭）のお嬢様やす子さんが、この学院でピアノ科の教授を務めている。

やす子さんは、ロータリー・クラブの交換学生として1年の予定でベルギーに行ったのだが、結局音楽関係以外のベルギーの男性と結婚し、住みついた。

出発の時、筆者はJALの羽田空港支店にいて、サベナ・ベルギー航空に手荷物のことで話した事を憶えている。お父様もハンサムな先生だったが、やす子さんは、色白で抜けるような美人だった。

福岡県サイクリング協会理事長の西島司郎氏の旅行メンバー（本誌寺田隆弘社主も）も、ベルギー旅行の際（本誌2001年11月号15ページ参照）、やす子さん宅を訪れ、歓待されたと聞いている。

2月12日、ホテル日航福岡の結婚式場、チャペル・プリエールのすばらしいオルガンを使用して、パリのノートルダム寺院のオルガニスト、オリヴィエ・ラトリー氏のオルガン演奏会が開催された。

フランスのオルガニストだから当然だが、プログラムは、ボエリー、フランク（ベルギー出身）、ギルマン、ヴィエルヌという、フランス近代作曲家の作品が主で、それにバッハが加えられていた。

中でもフランクの《3つのコラールより　第1曲ホ長調》は白眉だった。ラトリーさんの名人芸に加え、アルザス出身で、このオルガンを造ったケルン家の設計方針が、日本では少ないフランス近代オルガン曲向き（バッハも十分弾けるが）だからである。九州はオルガンが少ないことで嘆かれるが、逆にこういう演奏が聴かれるところは、全国でも多くない。

フランス近代オルガンの特徴は、ドイツのように音が鋭くなく、フランス近代オルガン曲の演奏に向くよう、シンフォニーのような広がりを持つ点である。

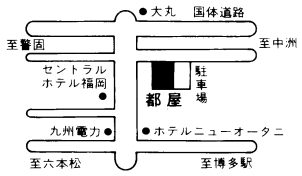
セザール・フランクは、パリ音楽院の院長となり、フランス音楽、音楽家の頂点に立ったが、フランスのオルガニストたちは、バッハ直系のベルギーのオルガニスト、ジャック・レメンスのもとに、バッハの演奏法を習いにいった。多くのフランスのオルガニストはその流れを引く。ラトリー氏のバッハも見事だった。

オルガンの演奏会には、最後に即興演奏がある。5つの封筒から1枚を聴衆の1人が引いたら、なんと《君が代》だった。ラトリーさんは略譜を前に、約10分間即興演奏を行い、聴衆を魅了した。

フランスの庶民のメロディー、そして本物のフランス文化の音色が博多の街に春を告げる。それにしても、ラトリーさんの演奏会に来た人が、博多の人口に較べて少なかったことが、「沈黙の春」のようでさびしかった。

誂紳士服のタケハラ
川端通り(二七一二九八一)

ハッピーギフトをお届けする…
記念品・販促用品・中国掛軸・広告マッチ
旅行業も致しております。



㈱ 都屋
本社 〒810-0004 福岡市中央区渡辺通3丁目6番22号
TEL (092)771-8833(代表)
ラッキィ パパサン
小売部 TEL (092) 741-5558
FAX (092) 781-5221